



第398回 5/17(火)

「emotional connection」

代表 原田 美佳さん 会員 児玉 芳郎さん



不登校の子どもの保護者、元不登校経験者の保護者や家族、学校関係の先生等のメンバーと共に子育ての悩みや想い、現状の不安を吐き出すことで少しでも心が軽くなればと、毎月2回居場所として「エモ会」を開催しています。安心・安全な場で共通の悩みを持った仲間と過ごすことで心が軽くなり笑顔でいられるエモ会、その雰囲気は「和気あいあいです。ぜひ参加して欲しい」と原田さんは語りました。



次回出演

400回 6/7 (火)「グロリアのスペイン語」

401回 6/21 (火)「親業勉強会」

FMやまと 77.7MHz 第1.3.5(火) 生放送 9:00 ~ 10:00 同日再放送 15:00~

第399回 / (火)

「市民活動グループ

ごきげんカンパニー」

代表 田中 かおりさん



「家族の介護でつづれる人をなくしたい」ご自身の経験から生まれた思いを理念に2019年に人5名で設立しました。一般の方と専門職の方が共に介護の経験談や専門的な知識をシェアし、現在は9名のメンバーで講演会やセミナーを企画、実施しています。「家族の介護を乗り切るための連続セミナー」(令和4年度大和市民活動推進補助金事業)を令和4年6月~令和5年2月迄開催予定です。



## TSUBASA's トーク 第8回 「生まれて初めての田植え体験」

### ①個人の農家や農事組合法人、小中学校で田植え手伝う

「緑のふるさと協力隊」として岩手県一関市で活動を始め、約2ヶ月が経ちました。現地では農作業や地域のイベントを中心にお手伝いをしています。4月の農業体験で地域の方々と一緒に稲の種も、5月の連休を過ぎた頃には10cm以上の苗に育ち、苗箱に根を張りました。

したがって5月の活動は田植えが中心になりました。体験先は個人の農家さんだけでなく、農事組合法人や、手植え体験をする地元の小学校、県外の中学校の手植え体験を運営する市のニューツーリズム協会などです。体験先とは4月に顔を合わせ、自治体の担当者も事前にアポを取ってくれていたため、僕は事前に簡単に打ち合わせし、当日現地に行くだけでボランティアをすることができました。



農事組合法人の田んぼは広い！

### ②田植えで疲れが溜まるが、長続きさせる方法を知る

生まれて初めて田植えを体験し、米作りに非常に手間がかかっていることを知りました。

個人の農家さんや農事組合法人の手伝いでは、ビニールハウスで育てた苗を軽トラックに載せる力仕事や、軽トラックから田植え機に苗を運ぶ作業、根の絡まった苗箱を洗う片付けなどをしました。普段からランニングをしているので体力に自信はありましたが、慣れないからか、こうした作業の後には毎回腕や腿が筋肉痛になり、徐々に疲れが溜まっていきました。



苗を運ぶ作業

作業自体は大変でしたが、地域の方々はこの作業を楽しく長続きさせる方法を知っているように思いました。苗箱

を運ぶときに僕も一緒になって冗談を言い合ったり、「一服」と呼ばれる作業の合間の休憩時間に、雑談しながらお茶やお菓子をいただいたりもしました。

中学生と手植え



### ③手植えを通じて小中学生と交流

こうした米生産の場を教育利用する小学生や中学生の手植え体験は、いわゆる付加価値を生み出す「6次産業化」の一つの形であるように思いました。手植え体験は、地域の農家の方々と中学校を一関市のニューツーリズム協議会が仲介する形で開かれました。

仙台から中学生が田植え体験に来た時には、土の上を素足で歩いたことのないような生徒に手植えを教えました。自分が中学生だった頃を思い返し、同級生のような気分で接したり、一方で生徒から「先生」と呼ばれたりするなど、交流としても面白かったです。

また地元の小学生の手植え体験では、小学校との繋がりのある農家さんが「田んぼの先生」と名乗り、児童に手植えの方法や歴史を説明していました。子どもたちは普段から親の手伝いをしていて、手で植えるのが速く、僕は同じペースで植えるのに必死でした。

小学生と手植え



植えられた苗

植えられた苗は、今後田んぼの水量が調節される中、成長していくそうです。一番大変そうな田植え作業が一通り終わり、ホッとします。(サポーター 尾畑翼)

\*農事組合法人は農業生産の協業を図る法人です。農業生産の協業を図る法人であることから組合員は原則として農民の方です。(農水省)

大和市民活動センターは「大和市新しい公共を創造する市民活動推進条例」に基づいて設置されています。

「あの手 この手」 第179号 発行日: 2022年6月10日

大和市民活動センター <開館日 月~土 9:00~18:00>  
<休館日 12月29日~1月3日・毎月第3日曜日>  
〒242-0018 大和深見西1-2-17

発行:大和市民活動センター 拠点やまと

TEL:046-260-2586 FAX:046-205-5788  
e-mail:yamato@ar.wakwak.com  
http://www.kyodounokiyoten.com/

あの手この手で考えて、あの手この手で問題解決!

# あの手 この手

あの手この手のマークの間のSIは solution(解決)のSです。

第179号 2022年6月10日 大和市民活動センター【拠点やまと】発行

6月号  
2022



ペテルギウス玄関  
6月1日の生け花



表紙絵は「やまと国際フレンドクラブ」主催  
2021「第14回やまと国際アートフェスタ」  
入賞作品を掲載しています。

今回のテーマは ~ 笑顔のために ~

Office KAZU 賞

黒野我愛羅 さん

大和中学校(1年)《スリランカ》

タイトル: 「世界は笑顔！」

メッセージ: 虹色でジェンダーレスを表現して、五輪でオリンピックを表現して、地球が笑顔になっているのは、世界中が笑顔になるように願い、描きました。

「やまと国際アートフェスタ」は  
「やまと国際フレンドクラブ」(IFC) \*の主催で  
毎年催されています。

\*草の根の国際交流、外国人支援を行いながら  
「とくにらすまち 大和」を考えるボランティアグループです。

令和4年度

協働事業等提案公開プレゼンテーション開催

日時: 6月25日(土) 午前10時~午前11時30分(予定)

会場: 大和市民活動センター 会議室棟202

これから協働事業を考えている団体の方は、活動、提案の参考になると思います。傍聴を希望される方は市民活動課へ。(傍聴5名)

\*協働事業とは、市民、市民団体、事業者及び市が、お互いの提案に基づいて協力して実施する社会に貢献する事業です。



①障がい者と地域住民とのふれあい体験活動を通じた共助・共生社会の実現を目指す事業  
・透析者と小中学生との交流学習の実施  
・透析者の地域防災訓練参加  
NPO 法人大和市民活動センター / 教育委員会指導室、健康福祉総務課

②家庭訪問型子育て支援ホームスタート  
・子育て中の親へ寄り添い心身の負担軽減につながるよう支援することを目的に、子育て中の家庭に訪問し、傾聴を実施  
NPO 法人ワークス・コレクティブ チャイルドケア / すくすく子育て課

ウイズコロナ、ポストコロナの時代  
市民活動、NPO活動、社会貢献活動はどうあるべきか  
先駆の人を訪ねて 第6回

福祉施設でアート活動をするということ  
①その表現活動を仕事にする!!

中津川浩章（なかつがわ ひろあき）さん

認定NPO法人アール・ド・ヴィーヴル/障害福祉サービス事業所アール・ド・ヴィーヴル（生活介護・就労継続支援B型） アートディレクター・理事



ガトーショコラ!!  
お皿もかわいい!!



シリーズ第6回は、「先駆の人」として、画家で、アートディレクターの中津川浩章さんを足柄の施設のカフェ「art de vivre」を訪ねて、通所スタッフが運んできた、ガトーショコラとコーヒーを頂きながら、90分余り取材をさせていただきました。

中津川さんは、画家としてご活躍され、作品発表をされることはもちろん、数多くの展覧会のディレクションや、ワークショップを全国で精力的に展開されています。

今回は、そんな中津川さんに、特にご縁の深い「障がい者アート」の視点から、「福祉施設において、いかにアートを仕事とする仕組みをつくっていったか」、「アール・ド・ヴィーヴルの取組」、「障がいがある人と社会との関係」などを伺いました。

聞き手は、望月則男、船越英一 2022年4月14日

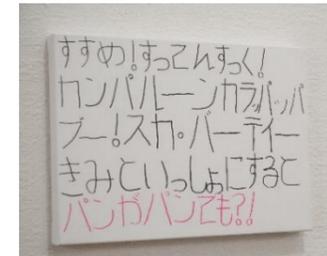
ート活動する施設を建てますということを保護者の方々に説明する訳です。

当時は今ほど、障がいがある人たちのアート活動って、社会的に全然認められていなかった時代なので、親御さんは大反対で、もう怒鳴られたり、泣かれたり、そういう中で関わるようになったというのが、そもそもの始まりです。

その後、「工房集」の展覧会を僕が全部ディレクションするっていう流れになって、アートディレクターとして、展覧会を年間に5、6本、いろんなところで開催するようになって、もう20年ぐらいですね。その間に、いろんなところから声がかかって、他の施設もみるようになり、専門学校でデザインやアートについて教えたりしていました。

その中で、美術の枠を超えて、福祉や障がい者アートにどんどん深くかかわるようになりました。

デザイン専門学校では、いろんなワークショップを行っていたので、それをうまく、障がいがある人たち、あるいは福祉スタッフ向けにやってきて、作家とスタッフを育てるということと同時にやってきました。それはいまだに続いています。



お伺した日に、カフェの壁面に展示されていた作品。気に入りまして

福祉施設でアート活動をするって、親御さんの理解を得るのは大変ですよ

福祉施設でアート活動をするこの意味が全然伝わらない。でも僕らは表現活動を仕事にする運動を始めた

そうですね。日本の場合はアートとかに生活が全然絡んでないでしょう。一般的にも。だから、アート活動に対するイメージが全然沸かないんですよ。自分の子どもは重度で、もう言葉もしゃべれない。そのぐらいの重たい人たちがアート活動なんかできるはずがないって思っている。

そういう流れの中で、まあ逆風の中で、何人かの人たちがちゃんとブロックしてくれて、だんだんその活動が順調になっていくにしたがって、重度の人たちの作品が売れたり、評価される。それによって、その当人が元気になったり、表情がない人たちの表情が出てきたりとか、明らかに変化が出てくるのを見て、批判的だった親御さんたちが、衣食住のサポートが福祉だと思っていたけど、やっぱり生きる力とか豊かな生活とか公言することが人間にとって大切で、それをサポートするのが本来の在り方ではないかという、人間が生きていくうえで、当たり前なのに気がつ

\*2「アール・ブリュット」とは「生の芸術」を意味するフランス語である。その解釈は人によってさまざまだが、「正規の美術教育を受けていない人による芸術」「既存の美術潮流に影響されない表現」などと説明されることが多い。

きます。それまでは生きてくだけで精一杯、「感謝しなさい」ぐらいの感じだったものがね。

実際、福祉の中で何が行われているかという、衣食住のサポートなんですよ。基本的にはそのサポートでこと足りてしまうっていうのがあって、障がいがあってもなくても豊かな生活をするっていうのは、ほんとに夢物語みたいな感じだったんですよ。けど、そういう夢物語を実現していく中で、障がいがある人がそれによってめっちゃ生き生きしてくるとか、そういう変化をみんな目の当たりにして、驚愕して、「これ福祉の一番大切なところなんじゃない」って気付いてある意味、すごく変わってきたんです。

重度の人たちが工場の孫請け仕事みたいなものやっていると、たとえばボールペンの組み立てとか、箱折りとか。そうすると、重度の人たちだから能率悪いわけですよ。一日みんな頑張ってもそんなお金にはならない。おまけに返品率がすごく高い、それはもう健常の人がやるのと比べれば、雑だったり、集中力も続かなかったりするので、一生懸命やっても「あんたのとこ本当に返品多くて困るよ」みたいな嫌味を言われたりする。

でも、重度の障がいがある人でも絵はみんな描ける。絵というか、「ぐるぐる」したりとかね。ちょうどその頃、冒頭でお話した「エイブル・アート・ジャパン」が活動し始めたのを見て、こういうことを仕事にできるし、そういう運動が今あるよねっていうので、工房集の前身の人たちは僕らの活動によって、通所者が表現活動することで、それが仕事になるんじゃないかと考え、それを仕事にする運動を始めたっていう感じなんですよ。

この小田原、足柄でアート活動する施設を始められたきっかけは

認定NPO法人アール・ド・ヴィーヴル理事長になることになる萩原美由紀さんと出会ったことです

工房集で、僕が最初に関わった時は、5、6人ぐらい絵を描いていたけど、今は多分200人近い人たちがみんななんらかの創作活動をするような施設に変わってきたんですよ。付き合いは、もう27、8年ぐらいになります。障がいがある人の表現をめぐる僕らの活動が注目される中で、当法人の萩原美由紀さんと小田原で出会って、僕のディレクションした展覧会を見て、僕が小田原の人だっというのを知ってコンタクトを取ってくれて、「小田原にも障がいがある人たちのアート活動できるような施設を作りたいんです」と相談されたのが、ちょうど10年ぐらい前ですね。通常、福祉施設がアート活動をやり始める一般的なパターンは、大きな法人があって、その中の一部をアート活動に特化する感じだとスムーズにいきやすいんですよ。まあ、メンバーさんを集める必要もないですから。けど、「アール・ド・ヴィーヴル」の場合はもう何もなかったところから作るようになったんです。

じゃあ、いろいろ考えてやりましようってことになって、月2回の障がいがある人たち向けのワークショップを定期的開催することにしました。その活動を見える化して、社会に発信して行って、それでNPOをまず作って寄付を受けやすくして、地域連携をつくって、それでだんだんお金が貯まってきたら、福祉施設を作るというロードマップを作って。5年前に就労B型の福祉施設を作ったんですよ。—そういう流れがあって今になってる。なかなかできないことですね。

萩原さんはNPOをたちあげるときに必要な組織をつくるためのネットワークを持ったすごい人だった

いやあ、できないです。やっぱりそのNPOを作る時も、どういう人を理事になってもらうのかとか、そういうことも含めて大変です。要するに当事者のお母さんたちだけじゃなくて、たとえば、地域のことをよく知っている方、医療、福祉、法律、教育関係とか、そういう人たちにも協力を得られると、地元で活動への支援も受けやすくなるのでとても大切なことです。

そうしたら萩原さんが、そういう人たち「全員、理事になってくれました」と言うので、もうびっくりでした。「すごい、この人」と思って。これなら絶対できると思ったんですよ。萩原さんは、「ひよこの会」っていうダウン症の親の会の会長さんで教育委員もやられていて（当時）地域の繋がり、ネットワークをすでに持っていたんですよ。



織りに使うきれいな糸がたくさん並んでいる

それで、ちゃんとNPOもできて、普通だったら考えられないような人たちが理事になってくれて。そうすると社会的信用度も上がりますし、活動もしやすくなります。

—やっぱり、中津川さんのような専門家がいても、一般的にはそういう組織を作っていくかといけないうんですね

そうですね。そうすると周りの見る目も変わってくるし、そういう中で、だんだんだんだんワークショップに来る人たちも増えてきました。

最初はダウン症の子どもたちだけだったのが、自閉症もそうだし、車椅子の人たちもって、だんだん受け入れるようになって、広がってきました。それでこう、新しくB型の施設を作るときには、そういう人たちも入所して、通えるようになるというので、それは、大変ですけど、だんだん利用者さんが増えて、今に至るっていう感じです。

現在はそのB型プラス生活介護という、さらに重度の人たち、車椅子とか、そういう重たい人たちにも通ってもらって、アート活動をする。アートを仕事にしているんです。

(次号に続く)

中津川さんが「障がい者アート」の世界に関わるようになったきっかけを教えてください

日本障害者芸術文化協会(1994年設立)がエイブル・アート・ジャパンと名称変更をして、活性化した時代に知り合いに誘われたんですよ

はい、もちろんです。関わって30年ぐらいですね。僕、職業は画家ですから、よく個展をしていたギャラリーで、「アート・アンド・デイケア」という企画展をやっていました。精神病院に通って、患者さんと一緒に作品を作り、アドバイスをします。保健所のデイケアに来ているうつ病等の人たちと一緒に、作品を作るということを定期的に2年間ぐらいやりました。

ちょうどその頃、「日本障害者芸術文化協会」っていうのがあったんですけども、それが、2000年6月に、「エイブル・アート・ジャパン」と名前を変え、活性化した時代だったんですよ。その立ち上げの時に、たまたま僕の知り合いが関わっていて、「中津川さんもこういうの好きでしょ」みたいに誘われて、ボランティアで展示を手伝いました。

2001年には、全国公募展の審査員をやったり、ちょうどその頃、\*1「工房集」が開設する前で、展覧会を手伝ったときに、「新しい施設を作るので、ちょっと一緒にやってくれませんか」と言われて、「建築計画」に加わり、「模型を見ながらのミーティング」、「保護者説明会」に参加しました。ア



施設に併設されているカフェ「art de vivre」  
カフェは、火、木曜日  
13時から15時まで営業

\*1工房集は埼玉県川口市にある福祉施設で、社会福祉法人みぬま福祉会を利用するメンバーの表現プロジェクトを社会につなげるための活動拠点として2002年に開設



みんな、アートを仕事としている  
作品の展示方法も工夫している

認定NPO法人  
アール・ド・ヴィーヴル  
の皆さんの作品が神奈川県  
の「ともいきアートサポート事業」  
の一環で展示されています。  
○会期7月7日(木)まで  
○場所ランチ茅ヶ崎2  
サンノイチ及び  
2階エントランス  
(茅ヶ崎市浜見平3-1)



作品は入れ替えがあります

編集・文責・写真:船越英一